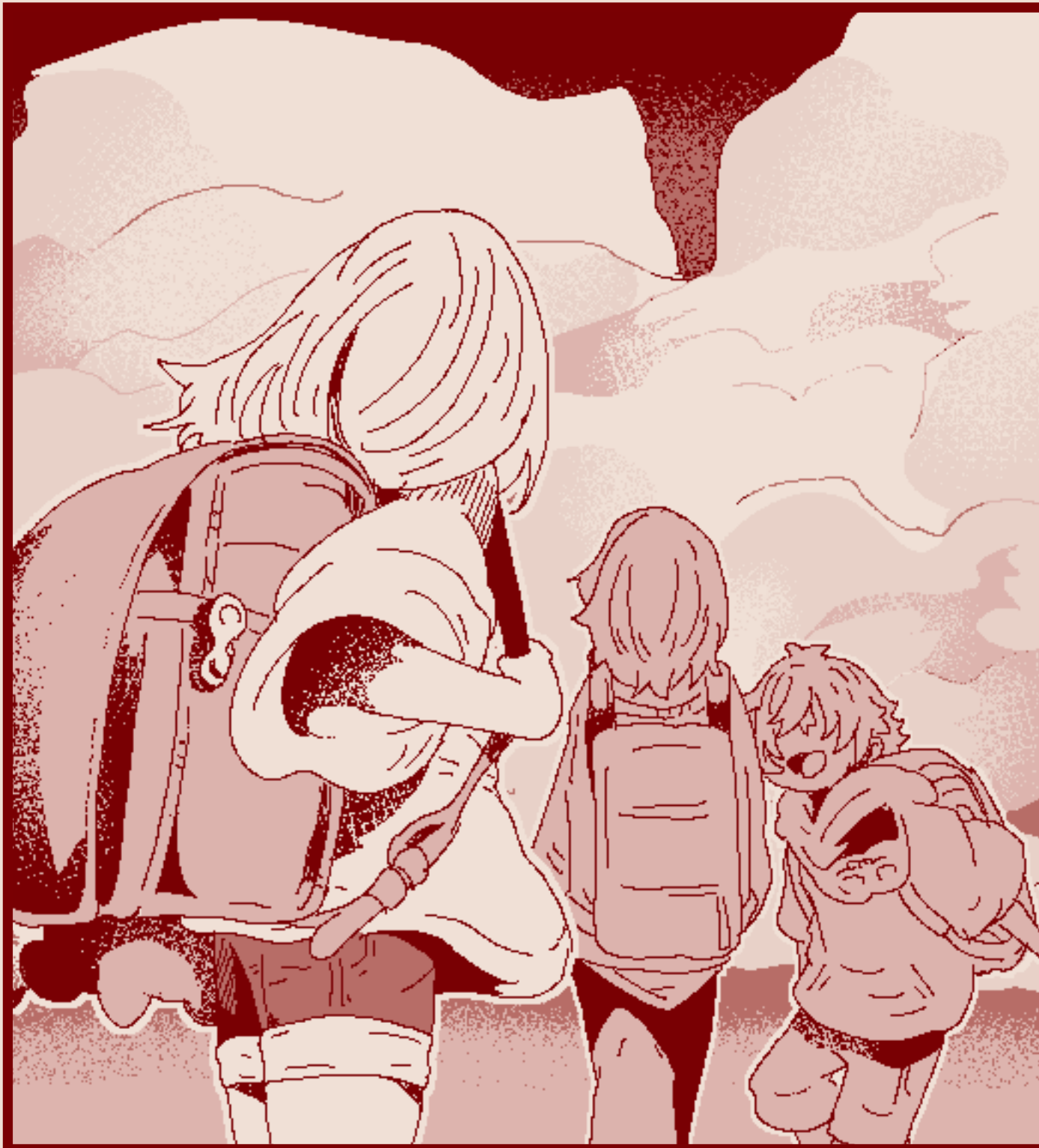




光がオグドモンとの等価交換により、デーモンの侵攻へ加担した。
そして、オグドモンのコアとしてデビドラモンをガルフモンへ進化の対価として、実父である鬼塚 圭吾は蘇った。
更に、現実世界と遜色のない仮想の世界を作り上げまた、家族と暮らす事とした。
蘇った圭吾は、これまでの現実世界での光と妻である秋子の経緯、デジモン等の基本的な知識は光により与えられていたが、DW での旅や、光が何と引き換えに自分を蘇られさせたのかは伝えられていなかった。
故にだが、現実世界から DW へ召喚され、泣いて謝り続ける妻、そして娘との生活は前向きに捉えていた。
最初は、仮想世界ならと好奇心から突然、仕事をサボってみようかともしてみたが、現実と同じように職場から心配された事や、周囲の反応が現実と差がない事から深く考えるのをやめ、現実世界と遜色ない事を悟り状況を飲み込んだ。
妻からも改めて謝罪と経緯の説明を受け、光の状態を不安に思っていたが、自身の生前(?)と変わらぬ素直な姿なのが、自分の死の方が夢の世界の話に思えた。
「それでね!今日はね!」
出勤と合わせ早めに登校する娘と手を繋ぎ歩いて行く。
12 歳という年頃になるにしては、少し幼さの残る甘え方で心配にはなるもののやはり娘に素直に甘えられるのは父としても嬉しくはあった。
何より聞いた話が本当なら尚の事、今笑顔を向けてくれるのが嬉しかった。



「--- !!」

「---。」

少年の声が聞こえる。

見ると赤毛の少年…光と同年代だろうか、弾ける笑顔が印象的であった。

「…どうした光？同じクラ…。」

…圭吾は、肝が冷える思いであった。

今までの自分が知っている娘の表情ではなかった。

寂しさとそれを覆い隠すような光のない冷たい視線をその少年に向けていた。

「光…？」

「…！うん？なに？」

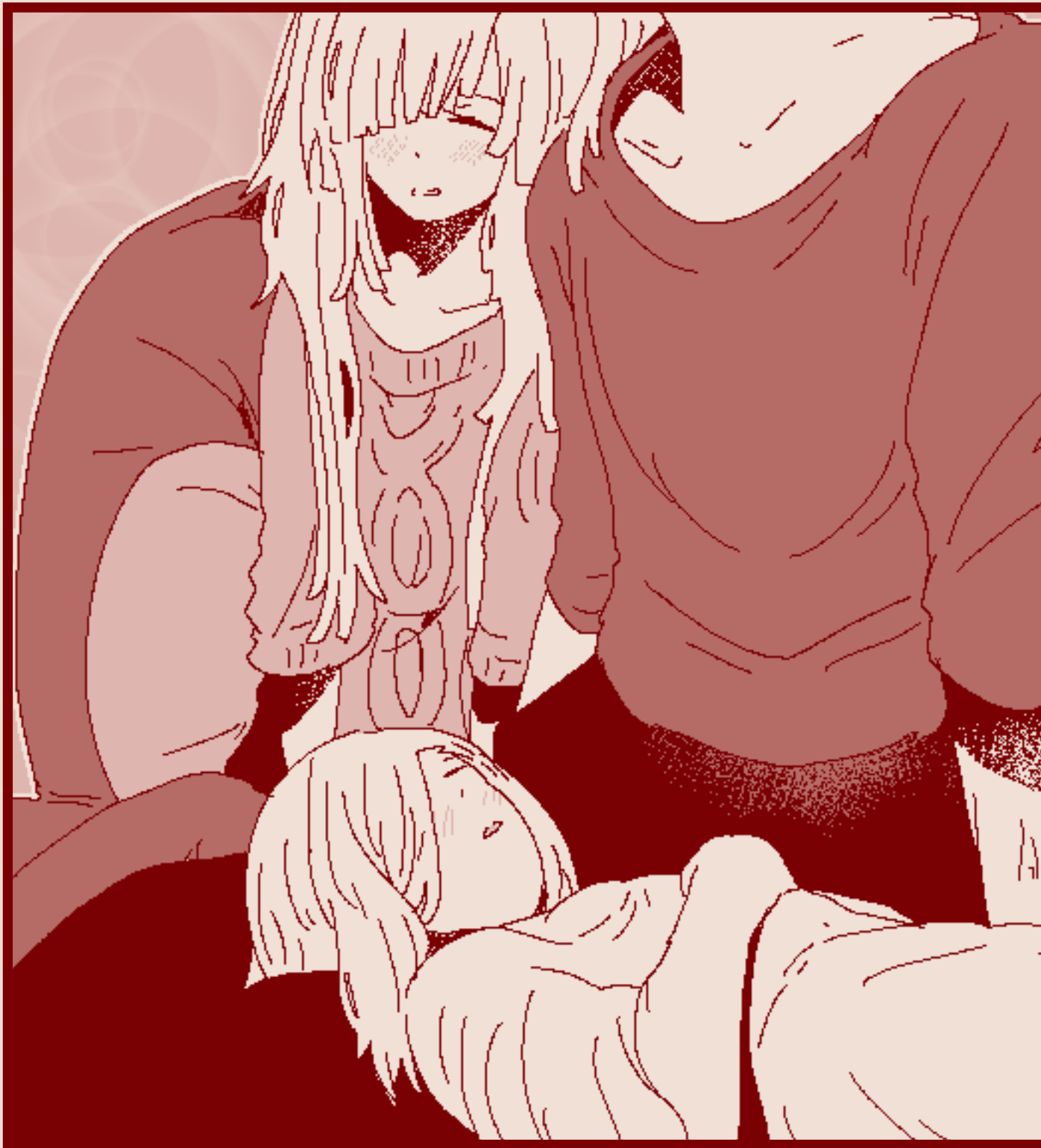
その表情は一瞬だけで、すぐにいつもの明るい笑顔をこちらに向けていた。

「…クラスの子かい？」

「うーうん、知らない子。」

ごく自然と、淀みなく光は答えた。

圭吾は光が、嘘を付くときの癖を知っている。



「あら？疲れて寝ちゃったの？」

「ん？ああ？夕飯前だけど疲れてたのかな？」

遊び疲れたのか、圭吾が家に帰ってくるなり、光が膝に頭を乗せ眠りについてしまった。

秋子が圭吾の隣に座る。

「このくらいの歳の子にしては疲れやすい気がするけど大丈夫かな？」

「…圭吾がいない間に色々あったから、この子も疲れてるのよ。」

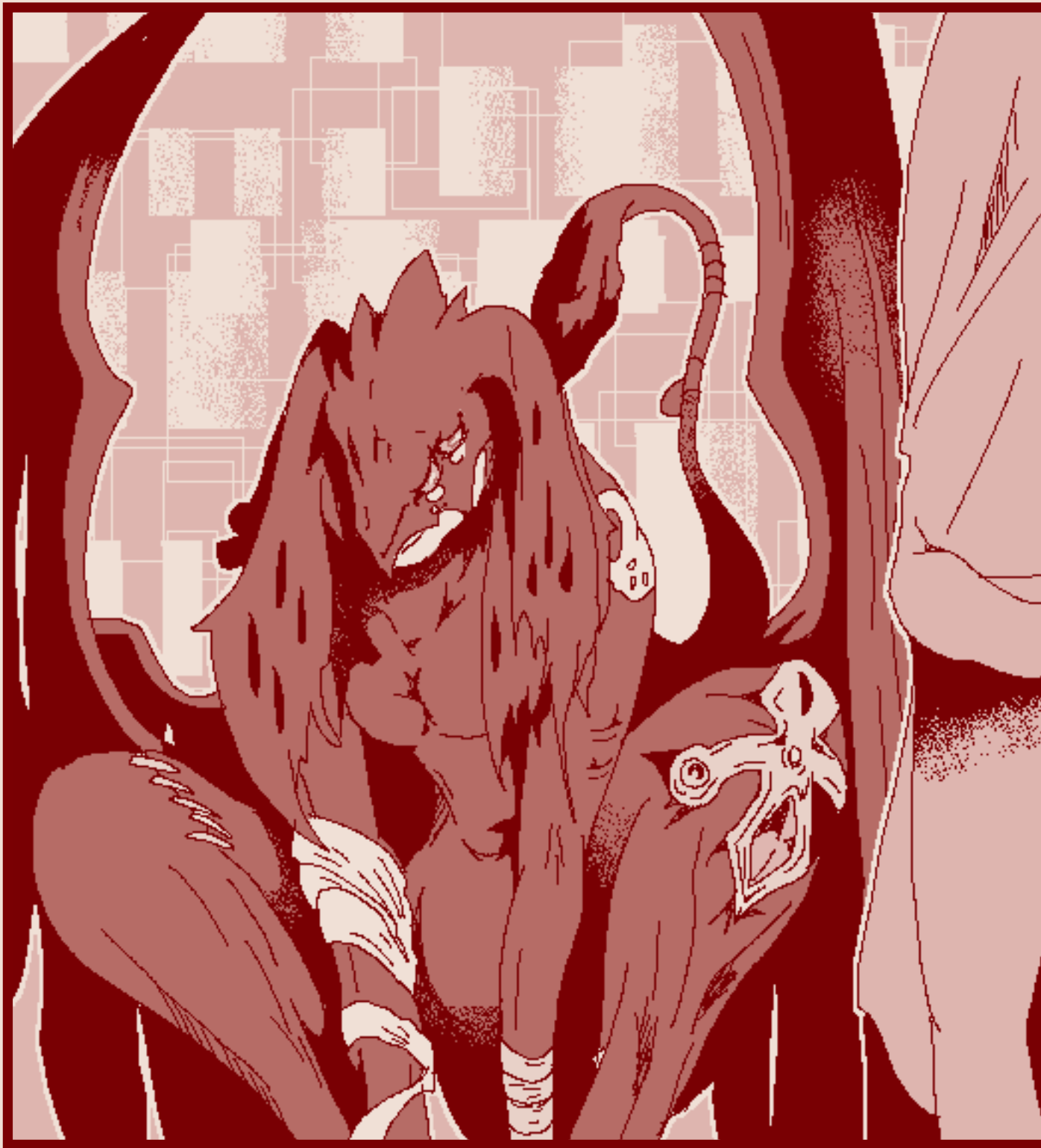
「ごめん…秋子さん達に辛い思いさせて。」

「…私のほうこそ、圭吾や光に本当は顔向けなんてできないのに…それでもこの子は私をまだ母親と思ってくれ…て…。」

喋ってるうちに秋子も船を漕ぎそのまま圭吾の肩に頭を乗せて寝てしまった。

「…寝顔もそっくりだ。」

圭吾は、少し笑みをこぼし、暫くしてもふたりが起きないのを悟り寢室に寝かせた。



（本当にそっくりだ…。）

圭吾には秋子と光の寝顔は本当にそっくりに思えた。

それを思い出し、視線が下に向き眉間にしわが寄る。

それは愛する妻子のこれまでの苦労と疲弊を如実に表していた。

自身も社会人、死んだように眠る人間は何人も見てきた。

更に自身は一度死んだのだ、その深さを直感で理解できた。

そして、不安が襲う。

特に光の顔を思い出すとその疲弊の深さ、今朝の赤髪の少年を見た時に見せた冷たい視線。

アレは軽蔑ではない、対極に位置する感情が何故かにあの冷却された視線へと変質させた云わば青い炎である。

居間へ戻るとノック音がした。

誰かが、窓を叩いている。

「!？」

そこには、人型に近い黒色の龍がいた。

圭吾は声を出さなかったのではなく出せなかった。

目の前の人ならざる異形と対峙し、それが死に直結すると思ったからだ。

人は目の前の対処不能のものに遭遇した際には、一度身体の機能が死ぬ。

大声という生物的な対処では不能と圭吾は判断した。

しかし、その仮死状態から早急に圭吾は生き返った。

妻子を危険から遠ざける為での蘇生ではない。

勿論ではあるが、身体が動き始めた際の思考の最前列に來たのはそれであったが、思考が再開したのは、目の前の異形があまりにも弱々しく、人間的な悲哀を帯びていたからである。

圭吾にはそれが、時折見せる大型犬が飼い主に罪悪感を隠すときのあの態度や、子供が怒られるかもと所在無げな落ち着きのなさに思えた。

しかし、すぐにその巨躯の危険性を理性で理解し、慌てふためく。

（熊!?光と秋子さんを…!間に合わ…篤!?）

圭吾の慌てふためく様子を感じ取り、異形も慌て出す。

なんとか、近寄ろうとするが目の前の窓ガラスに頭をぶつけ痛そうにした。

そして、少し冷静になったのか、何かを念ずるように目を閉じると今までいた景色が一変し、電子空間のような場所が変わっていく。

圭吾はここが仮想空間であると聞かされていたが、あまりにな景色の一変振りにまた息を呑み、声のない叫び声を上げた。

異形が近づくが身体はまるで動かない。

異形の赤色の巨大で鋭い爪が圭吾の額に触れる。

その触り方は、人間の脆さを知っていた。

瞬間、圭吾の脳内には、様々な記憶が流れ込んできた。

目の前にいるのは、デジモンであるデビドラモン。

あの赤髪の少年は日野 勇太。

隣にはいなかったパートナーデジモンであるヴォーボモン。

そして、これまで旅の経緯を。

しかし、一点のみ記憶は欠落していた。

「光のパパさん、ついてきて。」

促されるまま、圭吾は着いて行く。



電子空間を出るとそこは、堅牢な作りをした廊下であった。
電灯はないが淡く光が溢れている、近いのは打ち付けコンクリートであったが、同時に有機的な気配も感じる。
ここは、オグドモンの体内。
それを模した巨大な像である内部は、ダークエリアから来たデーモンの部下達の拠点でもあった。
「ガルフモン？…の内部にあの世界は。」
「まわりに、みはりのデジモンいるから。
デビドラモン、べつのとこにゲートつくった。
あっ、あとにんげんってバレるとまずいからこれきて。」
「なっ…。」

…

「うっす、お疲れさん。」
「おつかれんです!」
「…しゃす。」
「なあなあ、あんな奴いたか？」
「ああん？デビドラモンなんてそこら中いるだろ？」
「そうじゃなくて…あっちのベツモン。」
そこには全身猫タイツで股間を盛り上げている 30 代成人男性の姿があった。
(妻子持ちの姿か？これが…、生き恥。)
(ご…ごめんなさい。
でも、デジモンにまぎれるのはこれがいちばんらくだから…!)
「ダークエリアにいたベツモンだろ。
兵士以外も皆んな、あこから逃がすためにデビモンさんが連れて来たんだから、そりゃあ混じってんだろ。」
「はあ〜、それにしても暇だねえ。
デーモン様ひとりで行っちまうし。」
「しゃーないじゃん。
俺らは、次の天使達との決戦に控えろって。
俺も嫌だぜまたあの天使に仲間が吹っ飛ばされるなんて。」
「俺は、さっさとガキ共（成長期、幼年期）をここから離してやりてえな。
ガキに戦場は毒だしよお。」
「…。」
すれ違い様のデジモン達の会話を聞き、少し圭吾は戸惑った。
記憶の中にあるデーモン達の部下の会話にしては、何か…一般的すぎたからだ。
「…。」
「というか、なんで光がデーモン達のところで？」
「記憶だと敵対してたような…。」
「うん…。」
そのことでひかりのパパにききたいことがあって…デビドラモンじゃどうしたらいいかわかんないから。」
道すがら、なぜこのタイミングでデビドラモンが現れたのかを聞いた。
先刻、オグドモンに何者かが多大な被害を与え、修復にリソースが裂かれ、ガルフモンの制御が幾分かフリーになった。
そこで、ガルフモンはデビドラモンを仮想的に作り上げ、光の寝ている隙に圭吾へ接触したという事であった。



「嘘だろ…。」

ベツモンの衣装が解かれながら圭吾は愕然とした。

外の様子が分かる場所にデビドラモンに案内され、見たのは廃墟の街とそこかしこで上がる爆発と硝煙であった。

それは正しく戦争であった。

（光は、あの世界を作り上げるためにまさか…。）

欠けていた一点、光がオグドモンとの等価交換に何を差し出したのか。

圭吾がデビドラモンをチラリと見ると泣きそうな顔でデビドラモンは頷いた。

確信した、光が等価交換したのは、この世界の破滅。

愛する家族の為に、全世界を生贄に捧げた。

鬼…悪魔の所業と言っても差し支えなかった。



圭吾は震えた。

妻子が後夫に乱暴されたのも、娘が12歳という幼さで売春業に手を染めたのも動揺したが、それもまた自分が呼びこんでしまった不幸に対して妻子の精一杯のあがきにも思え飲み込めた。

(しかし…これはあまりにも…。)

惨い。

デジモンには巨体の者もいる。

見れば、臓物を撒き倒れているものがゆっくりと霧散しているのも見える。

生物はその食物連鎖の中で、他者を犠牲にしながらも生きている。

当然の理であり、人間社会でも自身達でルールを敷きその中でその理に準ずる。

決してそれは負ではない、人間というのはそれにより他者を知り成長するのである。

とめどない思考が圭吾の頭を巡る。

「これを僕に見せたかったのかい…？」

君はこれがどういう事なのか…。」

「わかってる…でも、光のところがデビドラモンにつたわってくる…。」

光自身も気付いていない事であった。

しかし、12歳の少女が自身の人生を呪いとし、それを祓い除ける為に強大な敵と戦う旅は、疲弊でしかなかった。

そこにデビモンが見せた幸せだった頃の過去で思い出してしまった。

鈍色にくすんでいたものを思い出してしまった。

思い出したらもう歩けなくなっていた。

疲弊した少女は、あるかも分からないパートナーと自身の隣に立ってくれた少年との暗闇の中にあるかも分からぬ細い光を目指し歩くより、過去に煌く、劇しい光に誘蛾灯の様に引き寄せられた。

暗闇を歩くには、少女は傷つき、未来を賭けるほどの気力を失っていたのだ。

その心に繋がったデビドラモンは答えが出せなかった。

理性という判断では、自身の行動は万の罵倒の誹りを受ける事も承知であった。

しかし、世界に唯一その苦しみを知る他者である自分だけは、彼女の苦しみに寄り添うべきなのではないか。

それが、公平なのではないかと考えた。

「だけど…いまでもわかんない。

これってほんとうにしあわせなのか…光は、あのせかいでも勇太をみてる…。」

そして、例え暗闇でもいつかはそういった替えの利かない誰か達と巡り合えるのじゃないか。

そして、その誰かは命の数だけ可能性がある。

自分達がそれを握りつぶすのも余りにも不平等であった。

デビドラモンから涙が溢れ出てくる。

「それを光もわかってる…わかってるから…でも、光のパパたちがだいじなもわかってらうから。」



「…。」

圭吾はデビドラモンを抱きしめ撫でていた。

目の前にいるのは、光と同じくらいの少女、もしくはそれ以下の子であるように思えた。

誰にも相談できないような苦悩。

文字だけではまるで中学生が夢想するヒーローが使う単語であるが、これは肉の臭さに糞尿を混ぜ、そして粘液のように纏わり付くひとの奥底で本来燻っていないといけないものであった。

それを娘は他者の欲望により、目の前の子は娘により引き摺り出された。

排泄物は体内にある時はその不浄を認識できない、しかし、一度でも体外に出て付着すれば、その不浄はこびり付き離れない。

それが、目に見えぬ精神的なものであれば、洗浄は不可能と言っても過言ではない。

しかし、それを受け入れ快楽に変えてしまえば、性的嗜好と違い対処など殆どの人間にはできず、堕ちてしまう。

抱えて生きるしかないが、それをするにはこの子達はあまりにも幼すぎる。

罪悪感とそれ以上に目の前の幼い子を放っておけず慰めずにはいられなかった。

「デビドラモンはどうしたいの光のパパさん…。」

「光には、僕から話すよ…大丈夫、頑張ったね。」

「うぐ…うっ。」

止めどなく流れるデビドラモンの涙を落ち着くまで圭吾は受け止め続けた。

「ごめんね、こんな事くらいしかできなくて。」



デビドラモンも落ち着き、暫く立った後である。
空気が変わったのを圭吾とデビドラモンは感じた。
「…光、おきたみたい。
ひかりのパパさんさがしてる。
デビドラモンのからだも、もうそとだともたない…オグドモンのくうかんにもどっ
ちやう。」
「…うん。
きっと、僕と多分秋子さんもかな、光と話す時に事が動く。
その時は…。」
「そのときは…？」
「君の心のままに行動するんだ。
君の感じ方はきっと間違っていない。」
「でも…。」
「君は旅の中で光を救ってくれた。
僕はそう信じてる。
それに、あの赤髪の少年…ヴォーボモン、アンティラモン…サンドリモン。
そして日野 勇太君。
旅で君達を感じたものそれを信じるんだ。」
「…うん！」
デビドラモンが光になって霧散し消えていく。
それと同時に、空間が変わりまた仮想の世界へ戻っていく。
そうして、圭吾の前には光が俯きながら泣いていた。
「光…。」
「あいつの言う事…全部嘘だよ。」
圭吾は光が、嘘を付くときの癖を知っている。
自分の為の嘘の時、光は淀みなく答える。
しかし、誰かの為に吐く嘘の時に光は言い淀む。
それは、自身が誰かの大切なものを担うプレッシャーだからと圭吾は知っていた。
それが、もしオグドモンとの契約を破棄した時に自身に起こる事を暗に示していた。
「…。」
圭吾は目を閉じ、思案した。
自身だってやはり命は惜しいし、妻子の今後も考えてしまう。
それでも。
「光、話をしよう。」
圭吾は屈み、優しく笑いながら光の肩に手を降ろした。



（それでも大丈夫…僕が見たこれまでの旅の記憶。
それで感じたもの…。
デビドラモン…アンティラモン…サンドリモン…そして、日野 勇太君。
彼らがいればきっと…。）